



5月もゴールデンウィークを過ぎる頃になると浅井病院の職員は心落ち着かない日々を過ごすことになる。もちろんはんでん木まつりが近くなって各自分担の準備が慌ただしくなることもあるが、それ以上に当日の天気のことを気掛かりだからである。職員と患者さん、そして患者さんを支えてくれる地域の方々が一になって準備を進めてきた病院最大のイベントだけに「雨だけは降らないで」という思いなのである。はんでん木まつり実行委員の一人、三宅隆夫は日頃は神仏とはあまり縁のない人間だが、この時期ばかりは祈るような気持ちで空を見上げる日が多くなる。冬には一度葉を落とし切り、いま再び新緑をまとって5月の陽光に輝くはんでん木を眺めながら三宅は呟いた。「今年で祭りも14回目になるのか…。第1回目の時など地域の1精神科病院が主催する祭りに果たして人が来てくれるのだろうかと不安になったほどだ。それがいざ蓋を開けてみると1000人もの入場者があって、予想以上の盛況ぶりにこちらが驚いたほどだった。その祭りも今では皆さんが毎年心待ちにしてくださる地域の年中行事になった」普段はのどかな病院だが、当日は4000人近い来場者の方々に会場が溢れ返る、三宅はそんな光景を思い描いてみた。

あれはもう15年前のことになる。浅井邦彦院長(当時副院長)を囲んで三宅はじめ数人の職員が、精神科病院に対する偏見や患者さんへの差別をなくすために病院としても何か具体的なアクションを起こそうと話し合っていた。精神科病院イコール閉鎖的環境という短絡的なイメージを少しずつでも塗り替えていく手立てはないだろうか…。三宅たちの意見では地域の方々を巻き込んだイベントのような形がいいだろうということに一致したが、具体案が煮詰まっていたわけではなかった。そんな時、浅井院長が口を開いた。

「そうだ祭りをやろう、祭りを。地域の皆さんに院内に足を踏み入れていただいて1日楽しんでもらうというのはどうだろうか？」

院長のこの一言でその場の空気が大きく動いた。三宅も“祭り”という言葉聞いて、地域の人たちが病院内を自由に行き交う姿を思い浮かべて心が躍った。

さらに浅井院長はこうも付け加えた。「偏見や差別をなくす目的でも、それをふりかざすのは絶対に止そう。理屈抜きで楽しめるイベントを作れば、子供も含めて地域の皆さんが患者さんや職員とふれあいながらきっと自然に浅井病院を理解してくださるだろう」

こうして第1回はんでん木まつりの開催が決まり、三宅たち臨床心理士や精神科ソーシャルワーカーなど当時のコメディカル・スタッフが中心になって、全くのゼロの状態から祭りの“肉付け”に取り組むことになったのである。

「第1回はんでん木まつり」のパンフレットによると、中庭にステージを組みボランティアによる演し物や模擬店、協力事業所バザーなど、既にほぼ現在の祭りの原型が出来上がっており、三宅たちスタッフの当時の苦勞がしのばれる。

児童にステージに上がってもらえばきっと家族が見に来てお客様になってくれ

5月のはんでん木まつりでは、はんでん木の苗木をみんなに悦んで持って行っていただくのが楽しみである。

この大木を見上げると、これこそが病院のシンボルであると思う。

5月の空に、日本国内の木では珍しい形のうす緑色をした葉をながめるのが楽しみである。

＜病院設立40周年の年頭にあって
理事長 浅井邦彦＞



心と体を科学する

私たち医療に携わる者として、患者さんに最新の医療を提供することはもとより、たえず科学的立場から心身の両面にわたる探求を続け、その成果をつねに診断・臨床の場に生かしていきたいと考えています。さらに脳の機能と精神疾患の関係など、21世紀の精神医療にとって顕著かつ深遠なテーマにも積極的に取り組んでまいります。



上：徳田診療部長と池田内科診療部長



上：毎月開催される院内研究会



上：MRI



上：ヘリカルCTスキャナー



左：世界最速最高機能で診断ができるGEのMRI(1.5T)



上：内視鏡(秀野副院長)



上：内視鏡



上：エコー



上：終夜副波



下：X線透視装置



上：副波検査